

貝塚洪水伝説 - フィリピン、ルソン島カガヤン川下流域における貝採集民の民族考古学 -

小川英文・東京外国語大学
民博印東研発表レジュメ、12.19, 2003

はじめに

70年代から開始されたフィリピン北部ルソン島カガヤン川下流域に分布する貝塚群の考古学調査は、その後、80年代から本格化し、今日までに多くの報告がなされている。カガヤン川下流域には、河口から遡って40kmにわたり、大規模な貝塚遺跡が分布している。その立地は海岸砂丘、河岸段丘上、内陸そして石灰岩台地上と多彩であるが、各貝塚とも貝層は厚く、しかも広範囲におよび、最大のもので幅100m、長さ1km、深さ2m以上におよぶものもみられる。またこれらの貝塚を構成する貝種は海岸砂丘貝塚をのぞけば、いずれも淡水産二枚貝一種を主体として構成されている。これら貝塚遺跡群の年代については、最も古いと考えられる石灰岩台地上のマギピット貝塚でBC2000年紀の前半、河岸段丘上のカタヤワン貝塚でBP1000年頃の年代がC14測定値からえられている。また、現在でもカガヤン川下流域では貝層を主体的に構成する貝の採集が行われており、ラロ貝塚群は4000年前から今日まで、連綿と形成されてきた可能性が高い。そこでこのような大規模貝塚がどのように形成されてきたのか、また貝塚に残された動・植物遺体はどのような古環境利用によってもたらされたのか、という疑問に対する手がかりとして、現在でもこの地域で行われている貝最終活動の民族考古学的調査を行った。

1. **調査の目的**：現在、当該地域での貝採集を中心とした自然利用のあり方についての民族調査、考古資料と民族資料との比較材料の収集
2. **調査方法**：川を中心とする生計活動全般についての聞き取り調査
Form作成：1. Census, 2. Shell Gathering Activity, 3. River Activity, 4. Nutritional Research 5. Shell Vendor Research Form

1. カタヤワン村の概要と自然条件

1-1. カガヤン川下流域の自然・地理

立地：東西南を山脈に囲まれ、カガヤン川が北の海に注ぐ。河口から10kmの地点を起点として、下流40kmまでの河岸段丘上、内陸低地、石灰岩大地上に、淡水産二枚貝を主体とする貝塚が立地。

気候：気温(最高29.1:5月、最低23.2:1月、年平均26.7)、降雨量(年間2178mm) 国立天文台編『理科年表』1992

河面傾斜：40kmで10m。緩やかに海に注ぎ、満潮時に潮の逆流。

潮位の影響：干満の潮位差：155cm、干満時間幅：6時間42分、河口から10km。Camalaniugan測定。潮の逆流が貝の生息域に影響。満潮時の塩分濃度1%以下。

貝採集村と貝塚：現在確認されている貝塚1ヶ所のうち、貝採集が行われているのは3ヶ所(Camalaniugan, LaHo-Centro, Catayauan)。いずれも河岸段丘上に形成されたイバナグ(Ibanag)の村。

貝種：現在採集されているのは3種の淡水産二枚貝

Cabibi：カビビ、大6x5、高3cm、小2.5x2cm、高1cm、殻重55g・身10g、ハマグリ様。塩分に強く、カマラニウガンからガッターランまでに生息。年間を通して採れるが最近では減少傾向にある。採集後、1週間生存。

Asisi：アシシ、1.5x1.5、高1cm、シジミ様。フィリピンに広く分布。タガログ語ではトゥリア(Triya)。上流にも広く分布する。一度に大量に採れるが、雨期(10-1月)は採れない。この貝を採るようになったのは最近とのことで、CaibiやGinookanに対する採集圧がかかったためと考えられる。発掘資料からもこれを裏付けるように表土にしかみられない。

Ginookan：ギノオカン、1.5x2.5、高0.8cm、横長で殻薄い。ラロ・セントロからサンタ・マリアに分布域が限られる。Asisi同様に大量に採集されることもあるが、生息域が限定され、収量は小さい。採集後すぐ消費。発掘では量的には少ないが、上層から下層まで出土。

1-2. カタヤワン村の概要

河口から約24km地点、河岸段丘上に立地。人口約2000人(1985):人口構成表。貝採集民:68家族(431人:M243/F188) 1家族平均6.3人。世帯数100以上。村の人口の約1/4。貝採集の他に漁労活動・水田耕作・賃労働等で生計を立てている。75才の老人の話:子供の頃には25家族だった。

参照:カタヤワン村年齢別人口構成表・貝採集民年齢別しごと関与表およびグラフ。トゥロじいさんの家とガーデン・ク
ロップ分布図。

2. 貝採集行動:貝採集生計はどのように営まれているか。

貝採集行動フローチャート:採集から廃棄まで;

1. 貝採集? 2. 貝種選別? 3a. 家庭内消費・3b. 加工・3C. 売買? 4. 廃棄

2-1. 貝採集 採集方法:タク漁・網漁・素潜り・潮干狩り

2-1-1. タク漁(貝採集のなかで最も主要な貝採集方法)

使用道具:Taku/Liggik/Barangay

採集方法: Cabibi 中心。採集圧による減少で、戦後は Asisi も採るようになった。船で河の中央部に漕ぎ出し Taku を河底に降ろし、Liggik で川の流れを受けながら、Taku で川底を掻く。6 時間 40 分ごとの干満の変化にあわせて活動する。干潮時に開始。夜の方が収量多い。ASiSi を採る時には Taku の歯(nipan)を周密に差し込む。

採集場所: 活動範囲、場所選定には予めよく採れるポイントの情報収集

活動時間: 1986 年 6 月 7 日朝 7:35 から午後 1:00 までの活動記録(キコイじいさん: Francisco Vinnagrera 59 才)に同行
7:35, Barangay を漕ぎ出す・7:55 ポイントにつく・干潮になり流れは海に向かっていて。10 艘周りに出漁。まず Taku を入れてから Liggik をセットする。8:30, 1 回目の Taku 上げ。上げる時には Liggik をいったん水中から引き上げ水面に置く。Taku 上げから再セットまでにかかる時間は 2~3 分。8:50, 2 回目, 9:02, 3 回目, 9:20, 4 回目, 9:33, 5 回目, 9:41, 6 回目, 9:55, 7 回目。10:00 波が強くなり Liggik の「入れ」を半分にする, 最初のポイントから約 300m 流される。10:13, 8 回目。10:18 いったん最初のポイントに戻る。10:33 リセット。この時までには半ガンタ(1 ガンタは 3 kg)採れている。10:55, 9 回目, 11:15, 10 回目, 11:28, 11 回目, 11:45, 12 回目, 2/3 ガンタになった。12:08, 13 回目, 12:25, 14 回目, また下流に流されたので戻る。12:33 リセット, 12:42, 15 回目, 12:53, 16 回目, 1 ガンタ(3 kg)になる。1:00 陸へ戻る。作業時間 5 時間半。収量 3 kg。Taku 上げの間隔は約 15 分。2 時間の間隔で最初のポイントに戻る。

2-1-2. 貝採り網漁

使用道具: Karwas: 長い柄に径 50cm の捕虫網のような網

採集方法: 川辺や砂州の浅瀬で網を川底につけ、柄を前方で両手に持つ。足で河底の泥砂を網に蹴り入れる。網に入った貝を集める。Asisi, Ginoan 中心

2-1-3. 素潜り'

使用道具: 水中メガネ

採集方法: 河の中央部に船で行き、水中メガネを着けて河底に潜り、手で河底を探り、Cabibi を採る。同時に手製水中銃(Pisga)でエビや大もの魚も捕る。水の透明度が比較的高い夏に盛ん。

2-1-4. 潮干狩り

使用道具: 素手、貝を入れる袋や網。

採集方法: Asisi, Ginoan をめあてに川辺や砂州の浅瀬を手でさがす。女と子供は集団で採集に行く。

2-1-5. 貝収量:

効率(input/output) 活動時間と収量; 何時間にどの種類の貝を何キロ採り、そのうち何キロを自家消費し、あるいは売って
いくらの収入があったか。1986 年 6 月から 11 月まで 73 人についてのデータ(貝採集活動 input/output 表)

input: 1 人平均 1 日 5.2 時間(2-8 時間)、

output: 平均収入 45.5 ペソ(16-105)、自家消費は 14 例(0.5~3 kg) 採った貝を全て自家消費した例は 3 例 現在では採った貝をほとんど売って現金に換えている。

年間総収量: 仲買人のデータ(86 年 6 月から 87 年 3 月まで 107 日間)から類推

参照: 月平均収量表(1 人の貝仲買人が、何人からどの貝を何キロいくらで買取り、どこの市場でいくらで売ったか)・月別
1 日平均収量表

算定方法: 1 人の仲買人が取り扱う量は 1 日平均何キロか 年間何キロか カタヤワン村全体の仲買人 12 人が取り扱う
年間総量 1 日平均 Cabibi 取扱量 20.5 kg x 365 日 = 7482.5 kg x 12 人 = 約 90 トン

1 日平均 Asisi 取扱量 78.1 kg x 30 日 x 8 ヶ月 = 18.744 kg x 12 人 = 約 225 トン

別の算定方法：貝採集活動 input / output 表から

Caibi：1人1日平均収量 4.2 kg x 365 日 x 100 トン=約 150 トン

Asisi：26.6 kg x 30 日 x 8 ヶ月 x 100 人=約 640 トン

2-1-6. 貝採集まとめ

1) 貝採集の季節性

年間を通して採れる Cabibi に対して、Asisi は 10 月～1 月の雨期には採れない(雨量・気温との関係:図 ー 3、ー 4)。

2) 貝種による行動様式の違い：a 貝の生息域と b 道具の性格に關係。

Caibi は Taku を使って川の中央部。カマラニウガンからガッタランまで分布。Taku の網目と齒の目を調節して、Cabibi / Asisi いずれかに採集対象を絞る。GinooKan は川辺で Karwas が素手で採集。生息域がラロ・セントロからサンタ・マリアに限定される。

3) 年齢別に見る川生業の意味 参照貝採集民年齢別しごと関与表、年齢別しごと比率図。これらの表・図から、以下の傾向が指摘できる。

仕事上の男女の違い(図)

男と女では河に対する関わり方が大きく違い、直接、生業活動を営むのは男である。

女が直接に川と関わるのは、浅瀬での潮干狩りである。

貝売りは女の仕事で、高齢者の方が多く関与している。

女は 60 代でほぼ川の仕事から引退する。

年齢差に見る男の仕事の違い(図)

10 代の仕事には素潜りや潮干狩りといった、遊びの要素が強い。

タク・素潜り・漁陽といった川の仕事の代表格には 20 代が大きく関与している。

30 代以上は一家の生計の柱としてタク・漁労に活動の中心を置いている。

貝採り網漁(カルワス)はあまり行われていない。

素潜りは貝採集の効率から見れば、生業活動の中での重要性は低い、男っぽい行為として年長者の間でも続けられる。

潮干狩りは年齢と共に行われなくなる。20 代以降はぐんと減る。

フルタイム、パートタイムの違いについて(図)

10 代でパートタイムの素潜り・潮干狩りが多いのは、被験者の大半が少年であり、川で遊びながら、河になじみ、親しんで仕事を修得する時期にあたるからである。

生計の大黒柱であるべき 20-40 代にもパートタイマーが多いのは、川での生業活動から他の生計手段に比重を移しているからである。

50,60 代にパートタイマーが少ないのは、それ以下の世代よりも伝統的生計手段他の手段への移行を嫌う傾向があるからである。

2-2. 貝種選別

貝生息域と道具の關係にみるように、採集行動を起こす時点ですでにターゲットが決まっているので、異種貝間の選別はあまり必要ではないが、同種内ではサイズの選別が行われる。Cabibi は主要な収入源なので大小に関わらず売られるが、時折小さいものを選別している。

河に戻すことがある。Asisi は一度の収量が多いので、Akia というザルを使ってサイズをそろえる。大きなものは売りに出し、小さなものは自家消費に供したり、塩辛を作ったり、ゆでて身を取ってから売りに出す。

このように貝種が限定されている当該地では、同一種内でのサイズの選別が、商品の付加価値を高めるために行われている。

2-3. 利用

2-3-1. 自家消費

input / output 表(図) : 換金中心で自家消費は少ない(収量すべてを自家消費するのは3例)。消費する場合も 1kg 以下の端数のみ。調理は野菜と一緒に煮て貝汁にする。

2-3-2. 加工

Asisi の加工は前述したように、ザルで小もの(径 5 mm前後)を選別し、ドラムカンで大量に煮て身を取る。小ものの Asisi は特に sagasa と呼ばれている。作業は 80 kg の場合 2 時間煮て、水洗いし、身をとるまでに約 4、5 時間を要する。売り値は 1 ガンタ(3 kg)15 ペソで、標準の大きさの 2 倍、Sagasa の 30 倍で売られている。塩辛(バゴオン Bagoon)加工については実見していないが、Asisi と Ginookan が塩辛にされている。貝殻でこじあけて塩をまぶしカメに漬ける。以前は Cabibi をバゴオンに加工していたという。小魚の塩辛はより一般的。

2-3-3. 売買

採集された貝は貝殻のついたまま仲買人に売る。売りに行くのは主婦で、仲買人も女性である。カタヤワン村では 12 人の仲買人がいた。買った貝は市の立つ町へ運び、売る(図 - 4・5)。1 回に 100 kg ほどを売りに行く。Cabibi は 7 ペソ、Asisi は 3 ペソの利ざやを得る。年間総収量推定 月平均収量表(図 、 - 1・2・3)

2-4. 廃棄

採られた貝の最終的な行方 村内廃棄:自家消費・加工後 家の裏の径 1m 程のゴミ穴・家と川の中の畑 貝塚形成
村外廃棄:現在ほとんどの貝は村外で消費される。貝殻(Kappu)の利用:噛みタバコ用の石灰(アポッグ)づくり あまり行われていない。現在では採集されたほとんどの貝が売買のため村外に搬出されるので、貝塚への貝の恒常的供給が止まっている。

3. その他の生計活動

3-1. 漁労活動

魚種・漁具・活動領域・捕獲時期の対応関係

魚と漁具のサイズ、魚の生息域と習性との相関関係 魚種・漁具・漁法・捕獲時期・活動の場を特定することができる。

図・ : 漁種と漁法、活動領域。表:魚のサイズ・魚種・漁具・捕獲時期の相関関係表

3-2. 川以外での生計活動

農耕:後背地に水田や山を所有している人々もいる。家の周りには菜園・果樹を植えて、日常の食に供している。貝採集民の生計活動全体から見れば従。

賃金労働:カタヤワン村の住人は役所・会社の専従員・教員から木材会社・バス会社の臨時雇い、田植・稲刈りの手伝いまでさまざまな賃金労働口がある。貝採集民は川が増水する雨期に手間仕事に出る。昔は貝採集活動のみで生計を立てていたが、採集圧や上流からの土砂の流出による環境悪化で、貝のみに生計戦略を 1 本化できない状況になりつつある。また近代化の波とともに消費文化へのあこがれから、若い世代の貝ばなれ、川ばなれが目立つ。

4. 生計活動としての貝採集とその他の生業との関係

4-1. 年間活動カレンダー;一年を通じてどのように生計を立てているか。

貝採集・漁労:通年活動可能 生計活動の 1 本化。最近の変化:貝の減少 活動の分散

長い間この村で生活している人々は、貝・魚の生態やこれに見合った漁具の情報を抱えている。この知識をもって貝や魚を年中利用してきた。しかし人口増加とそれによる採集圧、上流での森林伐採による土砂流失が引き起こした環境変化などの要因によって、雨期(10-12 月)や現金が必要な時には他の方法で対処している。

4-2. 貝の重要性

貝がこの地域に特殊な資源として遍在 1 種類(Cabibi)の貝の採集に戦略を 1 本化 貝採集が男の仕事としての性格 パートタイムで賃金労働に出たり、まったく親の後を継がない傾向が強くなった反面、世代間の断絶無しに貝採集が行われている 単純な「現代」と「伝統」の対立構造ではない。

5. 他地域の貝採集民族事例との比較

5-1. オーストラリア:女・子供による海浜干潟の貝採集例 植物性食料採集と同義。これに対してここでは男中心の狩猟

的性格と生計活動の中で貝採集の突出

5-2. 日本:瀬田シジミ:先史時代から現在まで継続する貝採集例 採集方法から加工(佃煮)・売買(味噌汁の具 京都へ売りに)・廃棄(佃煮加工後に大量の貝殻)まで類似点多い。図

6. 東南アジア他地域の貝塚遺跡との比較

6-1.カタヤワン貝塚の規模と形成期間の推定

500mx50 mm x2 mm=50,000 立米 20cm 角(8000 立糶)= 3kg(Magapit 貝塚のサンプル)、50,000 立米=18,750 トン ÷ 年間収量 90 トン=208 年、20 家族の場合=1041 年

6-2. 貝種(川・海)・規模・立地・年代

深さ 1m 以下、貝塚径 100m 以下の規模 ラロ貝塚群の中でもカマラニウガン、ラロ、カタヤワン以外の貝塚は同様の規模でしかない。

まとめ

疑問点

1. なぜここでは貝採集が現在でも見られるのか? なぜ他の地域ではやめたのか?
2. 現在見られるような貝採集が先史時代から継続していたのか?
3. 狩猟採集民との貝の交換は?

文献目録

Classen,

1991 Normative Thinking and Shell-Bearing Sites. in *Advance in Archaeological Method and Theory*: 249-298, Tucson: The University of Arizona Press

Hockey, P.A.R., A.L.Bosman, and W. R. Siegfried

1988 Patterns and Correlates of Shellfish Exploration by Coastal People in Transkei: An Enigma of Protein Production. *Journal of Applied Ecology* 25: 353-63

国立天文台 (編)

1995 『理科年表』, 丸善

Meehan, B.

1982 *Shell Beds to Shell Midden*. Canberra: Australian National University. National Historical Institute

1993 *Historical Markers. Regions I- IV and CAR*. National Historical Institute, Manila

モルガ、アントニオ

1966 『フィリピン諸島志』、神吉敬三・箭内健次訳、大航海叢書 VII、岩波書店

Municipality of Lal-lo (ed.)

1985 *Barangay Profile of Catayauan*. Municipality of Lal-lo, Cagayan

小川英文

1996 『狩猟採集民ネグリのトの考古学ー共生関係が提起する諸問題ー』、スチュアート ヘンリ(編)『採集狩猟民の現在』: 183-222、言叢社

Ogawa, H. and M. L. Aguilera, Jr.

1992 Data Report on the Archaeological Explorations in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. *Journal of Institute of Religion and Culture* 10: 41-113

樋泉岳二

1987 「貝塚における破碎貝の形成過程について」、『文学研究科紀要別冊第 14 集』: 79-92、早稲田大学大学院文学研究科